

まってるすけ高柳

門出和紙に新工房オープン？「かみわさこきの家ことぶき」にかける思い

『かみわさこきの家』 わさこき= (技放き) 工作好き者(当地の方言)

門出和紙 代表 小林 康生

生紙(和紙)がいつしか特別なモノになり、身近な暮らしから姿を消しつつあります。現代の生活からは使いにくく高価なモノになっているのかもしれませんが。いつの時代でも暮らしの必需品であることが求められます。

当工房は、先祖(明治、大正)はもっぱら傘紙用紙と障子紙、昭和に入って白根の大冊用紙とつないでまいりましたが、小生が始めた50年前は引き継ぐことができず、画材紙、便箋、封筒など多種類で食いつないでその後、清酒「久保田」のラベルを主に生産して参りました。その後、隈研吾さんの依頼で海外の仕事も手がけるようになります。

紙漉きをしていた65歳までは作品には手を出さずにおりましたが、その後、自分の紙で草木染めにしたり、それを明かりにしたりするうちにこんなに面白いことは人にも伝えたくまりました。我が工房は、紙の原料である「楮がなりたい風土の紙」を是正としており、必ずしも使い手に合わせた優しい工房ではありませんが、ただ世の中に使われないモノになってしまったらその役割を終えなくてはならない。

コロナ禍の中でしばらく考えた末、それなら、現代を生きる人たちと日々の暮らしの中で使えるモノを一緒に作り出せば良いのだと考えるに至りました。今までの生産中心から少し舵を切って、作品にまで手を染めることには不安だらけではありますが、未来につなぐためのひとつの手法として腹をくくるとしました。



「かみわさこきの家ことぶき」になる予定の古民家の外観。



建物周辺のコンクリ工事は全て自分たちで行います。集落のベテランに応援を頼むことも。



若手スタッフの技術向上を図って内装のふすまの張替え練習中。湿気と張りムラに気を付けながら1枚1枚丁寧に張っていきます。

裏面に続く